

## ペナルティエリアに侵入した攻撃パターンの分析

### 【背景】

サッカーは得点が勝敗を規定するスポーツである。そのため、得点に関する研究が数多く行われてきた。そのなかでも Reep and Benjamin (1968) をはじめとするゲームパフォーマンス分析により、どのようなプレーが得点に結びつくかが明らかにされてきた (Roberson and Nicholson, 1988; Dufour, 1993; Olsen, 1998, Yiannakos et al., 2006)。これらの研究によると得点の約 70%はオープンプレーから生まれ、70%~80%の得点はペナルティエリア (以下 PA) 内でのシュートから生まれている。また、相手側 PA 内への侵入回数の多さは得点機会を増やし、勝利の可能性を高めるとされている (Rees et al., 2010; Ruiz-Ruiz et al., 2013)。これらのことから PA は得点をあげるために重要なエリアであると考えられるが、PA 内への侵入攻撃パターンに関する研究は見られない。そこで本研究は、PA 内への侵入攻撃と非侵入攻撃の比較分析により、PA 内侵入攻撃の特性を明らかにすることを目的とする。

### 【方法】

記述的ゲームパフォーマンス分析 (中川, 2011)

対象：2014FIFA W 杯ブラジル

グループステージ突破チームとグループステージ敗退チームが直接対決した 32 試合  
セットプレーを除いた (2 人以上がボールに触れた) 攻撃

測定項目：

グループ)

攻撃開始エリア・攻撃終了エリア・パス連続回数・保持時間・パステンポ・攻撃開始から PA  
侵入までの時間

個人)

タッチ数・選択プレー・プレー開始エリア・プレー終了エリア・プレー状況・ダイレクトプレー・プレー結果・保持時間・パス種類・前方 DF 数・側方後方 DF 数

### 【予想される結果】

- ・ バイタルエリアを利用した攻撃  
PA 侵入 > 非侵入
- ・ 攻撃中のダイレクトプレーの比率  
PA 侵入 > 非侵入
- ・ PA 侵入方法  
パス > ドリブル
- ・ 攻撃開始から PA 侵入までの時間  
突破チーム > 敗退チーム